

要約

＜Anyアート＞の受容探索 —地域アートはどこに向かうのか—

浅野幸治

概要

古民家、お寺、商店、廃止となった公共施設など多彩な地域空間を活用し、現代アートを主体にした「地域アートプロジェクト〈以下、地域アート〉」が、全国に広がっている。しかし地域アートとは、そもそも何で、なぜ求められ、それはどこをめざしているのか。

私に関わっている地域の「KASHIWARA芸術祭2019」では、過去から脱皮し地域的な特徴と方向性をめざす＜Anyアート＞を新たにサブテーマとして打ち出したものの、それは何なのかについて、まだ明快な答えや共通認識は得られていない。

本論は、＜Anyアート＞をキーワードに、「Anyアート99」のプロジェクトや地域アートツアー、アートセッションなど身近な地域におけるアートの資源探索とイメージ共有の活動を通じて、地域アートの方向性をとりまとめたものである。

意図

地域では、近年アート活動の取り組みが進み、関心が広がっているものの、現実には必ずしも上手く展開しているとは限らない。特に地域アートでは「実際の運営の仕組み＝人づくり」が課題で、人材が希薄であり、地域とアートのつながりや広がりを支える内実はまだまだ寂しい状況である。

そんな地域アートの課題解決の前提としては、まず「アートや現代アートとは」、「地域アートとは何をめざすのか」や、またオリジナルに設定した＜Anyアート＞について、企画推進の母体や地域の人々の中で認識やイメージの共有をめざすことが必要である。重要なことは、アートは、面白く、楽しいものだという人材を、地域で上手く育て、その人的パワーを具体的に結集することである。

そのためには、地域特性を活かし、公共空間をアートにより活性化する「アートなまちづくり」に向けた戦略のもと、地域の人がアート資源の探索に自ら主体的に関わり、考え、理解する具体的なコミュニケーションなアート活動を核に、アートの地域的な受容ネットワークの構築をめざしている。